

メンタルフレンド活動におけるメンタルフレンド自身への効果

中村 恵子¹⁾・河内 浩美¹⁾・小林 正子¹⁾・丸山 公男²⁾・平川 毅彦²⁾

1) 新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科

2) 新潟青陵大学看護福祉心理学部福祉心理学科

Effect of Mental Friend Activities on Mental Friends Themselves

Keiko Nakamura,¹⁾ Hiromi Kawauchi,¹⁾ Masako Kobayashi,¹⁾

Kimio Maruyama,²⁾ Takehiko Hirakawa²⁾

1) NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF NURSING

2) NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY

要旨

本学のメンタルフレンド活動は、病院や学校、福祉施設等において、児童福祉に関心のある学生が、メンタルフレンドとして地域の子どもたちへの支援を行うものである。本研究の目的は、メンタルフレンド活動をすることでメンタルフレンド自身にどのような効果があるのかを明らかにすることである。メンタルフレンド活動を定期的に実施しているメンタルフレンド6名を対象として、面接調査を行った。テキストマイニングという手法を用いて分析した結果、メンタルフレンド活動がメンタルフレンド自身の学びや自己の成長につながっていることが分かった。

キーワード

メンタルフレンド、テキストマイニング

Abstract

In mental friend activities at this university, students interested in child welfare provide support, as mental friends, to local children in hospitals, schools and welfare facilities. The aim of this study is to discover the effects of mental friend activities on the mental friends themselves. Six students who regularly carried out mental friend activities were interviewed. Analysis using the text mining method showed that mental friend activities were linked to the mental friends' own learning and personal growth.

Key words

mental friend, text mining

I はじめに

メンタルフレンド活動とは、平成3年に当時の厚生省が事業化した「ひきこもり・不登校児童福祉対策モデル事業」の一環として全国の児童相談所が中心となり「ふれあい心の友訪問活動援助事業」として開始されたものである。本学において現在行われているメンタルフレンド活動は、平成13年度から本学の押木泉教授が児童相談所を皮切りに不登校児を対象に取り組んできた活動を基盤としており、平成19年には文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」とし選定されたものである¹⁾。本学のメンタルフレンド活動では、ひきこもりや不登校児等、特定の子どもたちへの支援にとどまらず、遊びや話し相手など様々なふれあいを通して、児童福祉に熱意をもつ学生がメンタルフレンドとして広く地域の子どもたちへの支援を行っている。

先行研究の「『メンタルフレンド活動』におけるメンタルフレンド自身の主観的体験」において、メンタルフレンド学生6名を対象とした面接調査を行い、グランデッド・セオリー・アプローチによる質的分析を行った。研究目的は、メンタルフレンド自身が活動に対しどのような主観的体験をしているかを明らかにすることで、多岐にわたる施設での活動継続に向けたサポートシステム確立に向けての知見を明らかにすることであった。その結果、『メンタルフレンド活動を促進する』、『メンタルフレンド活動を阻害する』の2つの観点、29の概念、13のカテゴリーが抽出された。そして、メンタルフレンド活動全体における成果と課題を明らかにした²⁾。本研究では、同じデータを用いて、メンタルフレンド自身への効果に焦点を絞り、新たな分析方法によって研究を深めたいと考えた。

近年、様々な研究分野で、質的研究と量的研究のエビデンスの統合が試みられている。現象に対する複数の記述や説明、方法は内在

する現実あるいは事実に関連しており、統合は、単独の研究で達成できる以上に、理解を大きく促進する可能性をもつものである³⁾。研究方法として、質的アプローチと量的アプローチをともに用いる方が、どちらか一方だけを用いるよりもさらなる研究課題の理解を生むことが期待できる⁴⁾。

本研究の目的は、メンタルフレンド学生を対象とした面接調査から得られた質的データをテキストマイニングによる量的な分析によって、メンタルフレンド活動におけるメンタルフレンド自身の効果について明らかにすることである。また、質的データの質的分析、量的分析による結果を比較検討し、メンタルフレンド自身への効果について考察する。

II 研究方法

1. 研究対象²⁾

本研究の対象者は、定期的にメンタルフレンド活動が実施されている病院および児童相談所に活動登録し、複数回活動を行った本学の学生6名であり、福祉心理学科専攻3名、看護学科専攻3名である。メンタルフレンド活動場所は、小児病棟4名、児童相談所2名、児童養護施設1名、小学校1名であり、これまでに活動を行った施設数は、3ヶ所1名、1ヶ所5名である。性別は対象者全員が女性である。

2. データ収集方法²⁾

対象者へ事前に本研究の目的と方法を説明し、同意を得られた後、個別に大学内の個室ゼミ室にて60分程度の半構成的面接調査を行った。データの収集期間は2009年3月上旬～中旬および2010年2月下旬～3月中旬であった。

面接内容は、メンタルフレンド活動開始のきっかけ、メンタルフレンド活動をしてどうだったか、メンタルフレンド活動を行ってか

らの自分自身の変化などについてであった。

3. 倫理的配慮²⁾

対象者には、本研究の目的と方法を口頭および文書で説明し承諾を得た。研究への協力は対象者の自由意志であり、協力の有無によって不利益が生じないこと、いつでも協力を取りやめることができることを保障した。また、話された内容については、事前に同意を得て録音し、対象者本人に内容の確認を行った後に使用すること、今後学術集会で発表予定であること、個人情報の保護については個人が特定できない処理をすること、録音データは分析終了後に全て破棄することについて説明した。

4. データ分析方法

テキストマイニングという手法を用いて、録音したものを逐語録として文書化しデータとしたものを分析した。テキストマイニング・ソフトは、KH Coder (Ver.2. beta23 ; 2010) を使用した。KH Coderとは、新聞記事、質問紙調査における自由回答項目、インタビュー記録など、社会調査によって得られる様々な日本語テキスト型データを計量的に分析するために制作された、内容分析（計量テキスト分析）もしくはテキストマイニングのためのフリーソフトウェアである。⁵⁾

まず、頻出語150語と抽出語リストの表を作成し、語の抽出結果を確認した。抽出語リストは、品詞ごとに頻度順にリストアップしたものである。次に、個々の語よりも概念やカテゴリーを調べるために、抽出語リストに基づいてコーディングルールを作成し、コーディングを行った。各コードの関連を検索するために、共起ネットワークによる分析と階層的クラスター分析を行った。⁶⁾

III 結果

1. 全体的傾向

分析対象の総抽出語数（延べ数）は、50,531語であった。語の種類は2,542語、そのうち、分析に用いられたのは、2,095語であった。出現回数の多い単語から順に150語をリストアップした（表1）。

2. コーディング

表2は、コード名とコーディングルール、頻度、パーセントをまとめたものである。頻度はそれぞれのコードが与えられた文の数を、パーセントは文の数全体に対する割合を示す。

3. コードの共起ネットワーク

図1は、各コードの関連を共起ネットワーク（コード数29、描画数75）で表したものである。比較的強く結びついている部分を自動的に検出してグループ分けを行い、その結果を色分けによって示す「サブグラフ検出」で表した。出現パターンが似通ったコード、すなわち共起の程度が強いコードを線で結んで、各コードの関連を示しており、出現数の多いコードほど大きな円で、Jaccard係数で測定した共起関係が強いほど太い線で描画されている。同じサブグラフに含まれるコードは実線で結ばれ、互いに異なるサブグラフに含まれるコードは破線で結ばれている。実線で結ばれたコードは、①「言語的コミュニケーション」、「子ども」、「学び」、「施設」、「関わり」、「自分」、「観察」、「遊び」、「実践」、「場」（10コード）、②「体験・経験」、「活用」、「社会」（3コード）、③「非言語的コミュニケーション」、「成長」、「変化」（3コード）、④「感謝」、「癒し」、「信頼」（3コード）、⑤「社会的スキル」、「受容」（2コード）の5つのグループである。「家族」、「楽しさ」、「病気・障害」、「元気・純粹」、

表1 頻出語150語

抽出語	出現数	抽出語	出現数	抽出語	出現数
思う	326	大きい	32	兄	18
言う	305	あと	31	情報	18
子	209	経験	31	全然	18
活動	195	小学校	31	イメージ	17
行く	185	凄い	31	意味	17
感じ	178	後	30	関係	17
自分	154	行ける	30	体験	17
子ども	104	始める	30	状況	16
人	96	持つ	30	体調	16
今	90	知る	30	嬉しい	15
病院	90	風	30	困る	15
お子さん	87	養護	30	最近	15
遊ぶ	85	学生	29	接する	15
見る	84	興味	29	多分	15
実習	81	言葉	29	同士	15
フレンド	76	気	28	やすい	14
メンタル	76	参加	28	環境	14
結構	75	感じる	27	書く	14
聞く	75	勉強	27	仲良く	14
話	74	悪い	26	年齢	14
お母さん	68	成長	26	保育	14
時間	62	年	26	友達	14
笑	60	話す	26	センター	13
来る	60	大学	25	一つ	13
看護	59	月	24	慣れる	13
施設	57	他	24	出来る	13
最初	55	良い	24	生かす	13
行う	54	場所	23	接す	13
楽しい	53	遊び	23	対応	13
実際	53	一番	22	丁度	13
考える	52	好き	22	不安	13
違う	51	小さい	22	ホント	12
前	50	先輩	22	感動	12
入る	50	福祉	22	喜ぶ	12
相談	49	無い	22	教諭	12
児童	48	覚える	21	近い	12
自身	48	使う	21	嫌	12
一緒	47	社会	21	最後	12
先生	47	心	21	治療	12
いい	45	特に	21	授業	12
学校	44	分かる	21	小児科	12
多い	41	ボランティア	20	男の子	12
登録	41	気持ち	20	いつ	11
お話	38	終わる	20	強い	11
関わる	35	女の子	20	交換	11
声	34	教える	19	向こう	11
変わる	34	出る	19	思い	11
本当に	33	生活	19	時期	11
期待	32	会う	18	週	11
元気	32	機会	18	生かせる	11

表2 コード名とコーディングルール

	コード名	コーディングルール	頻度	パーセント
1	言語的コミュニケーション	コミュニケーション or 会話 or 立ち話 or 話 or お話 or 話す or 話しかける or 話し合い or 話し合う or 聞く or 聞ける or 聞かす or 聴く or きく or おしゃべり or しゃべる or しゃべれる or 言う or いう or 言える or いえる or 言い合う	553	20.4%
2	子ども	子ども or 子供 or 子 or お子さん or 赤ちゃん or 児 or 乳児 or 幼児 or 小児 or 学童 or 小学生 or 生徒 or 中学生 or 高校生 or 男子 or 男の子 or 女の子	354	13.1%
3	学び	学び or 学ぶ or 学べる or 得る or 覚える or おぼえる or 知る or しる or 知れる or しれる or 分かる or わかる or 気付く or 気づく or 勉強 or 学習 or 理解	205	7.6%
4	施設	施設 or 病院 or 病室 or 学校 or 小学校 or 教室 or 幼稚園 or センター	202	7.5%
5	関わり	関わり or かかわり or 関係 or 関わる or かかわる or かかわれる or 接する or 接す or つながり or つなげる or 繋がる or つながる or つなぐ or 結びつく	179	6.6%
6	自分	自分 or 自身	152	5.6%
7	観察	見る or みる or 見える or 見れる or 見せる or みせる	134	5.0%
8	遊び	遊び or 遊ぶ or 遊べる or あそぶ or 歌う or 走る or 走り回る or はしゃぐ or 踊る or 飾る or 飾り付ける or 飾り or 人形 or ゲーム or トランプ or 鬼ごっこ or ボーリング or ままごと or 絵本	119	4.4%
9	実践	実践 or 実施 or 臨床 or 実習 or 実行 or 行う	122	4.5%
10	楽しさ	楽しい or 楽しむ or 楽しみ or 喜ぶ or 嬉しい or うれしい	91	3.4%
11	場	場 or 場面 or 機会 or 現場 or 場所 or 環境 or 状況	85	3.1%
12	教職員	職員 or 保育士 or 院長 or 医者 or 看護師 or ワーカー or ソーシャルワーカー or スタッフ or 先生 or せんせい or 担任 or 教諭 or カウンセラー	77	2.8%
13	家族	家族 or 親 or 両親 or 親御 or 母 or 母親 or お母さん or お母様 or 姉 or 兄	75	2.8%
14	家族	家族 or 親 or 両親 or 親御 or 母 or 母親 or お母さん or お母様 or 姉 or 兄	72	2.8%
15	連携	相談 or 報告 or 連絡 or 橋渡し or 伝える or 伝わる or つたえる	68	2.5%
16	病気・障害	病気 or 疾患 or 癌 or がん or ガン or 喘息 or 体調 or 具合 or 症状 or 不健康 or 吐く or 障害	51	1.9%
17	変化	変化 or 変わる or かわる or 変える or かえる	44	1.6%
18	体験・経験	体験 or 経験 or 実体験	43	1.6%
19	支援	対応 or サポート or 支援 or 指導 or アドバイス or 支える or 励ます or 教える or 応える or 慰める or 示す	43	1.6%
20	元気・純粋	元気 or 明るい or 可愛い or かわいい or 正直 or 純粋	42	1.6%
21	大変さ	大変 or 辛い or つらい or しんどい or 切ない or 酷い or 厳しい or 難しい or むずかしい	40	1.5%
22	興味・関心・意欲	興味 or 関心 or 意欲 or 態度 or やる気 or 熱心 or 頑張る or がんばる	39	1.4%
23	活用	生かす or 活かす or 生かせる or 役に立つ or 役立てる or 活用	34	1.3%
24	非言語的コミュニケーション	笑う or 笑顔 or 触れる or 触る or 触れ合う or 抱きつく or 抱っこ	23	0.9%
25	成長	成長	22	0.8%
26	社会	社会 or 実社会	21	0.8%
27	感動	感動	12	0.4%
28	感謝	感謝 or ありがたい or お陰	9	0.3%
29	社会的スキル	挨拶 or あいさつ or 礼 or 礼儀	9	0.3%
30	信頼	信頼 or 安心	8	0.3%
31	癒し	癒す or 快い or 気持ちいい or 温かい	7	0.3%
32	受容	受け入れる or 受け止める or 認める	5	0.2%
33	自信	自信	4	0.2%

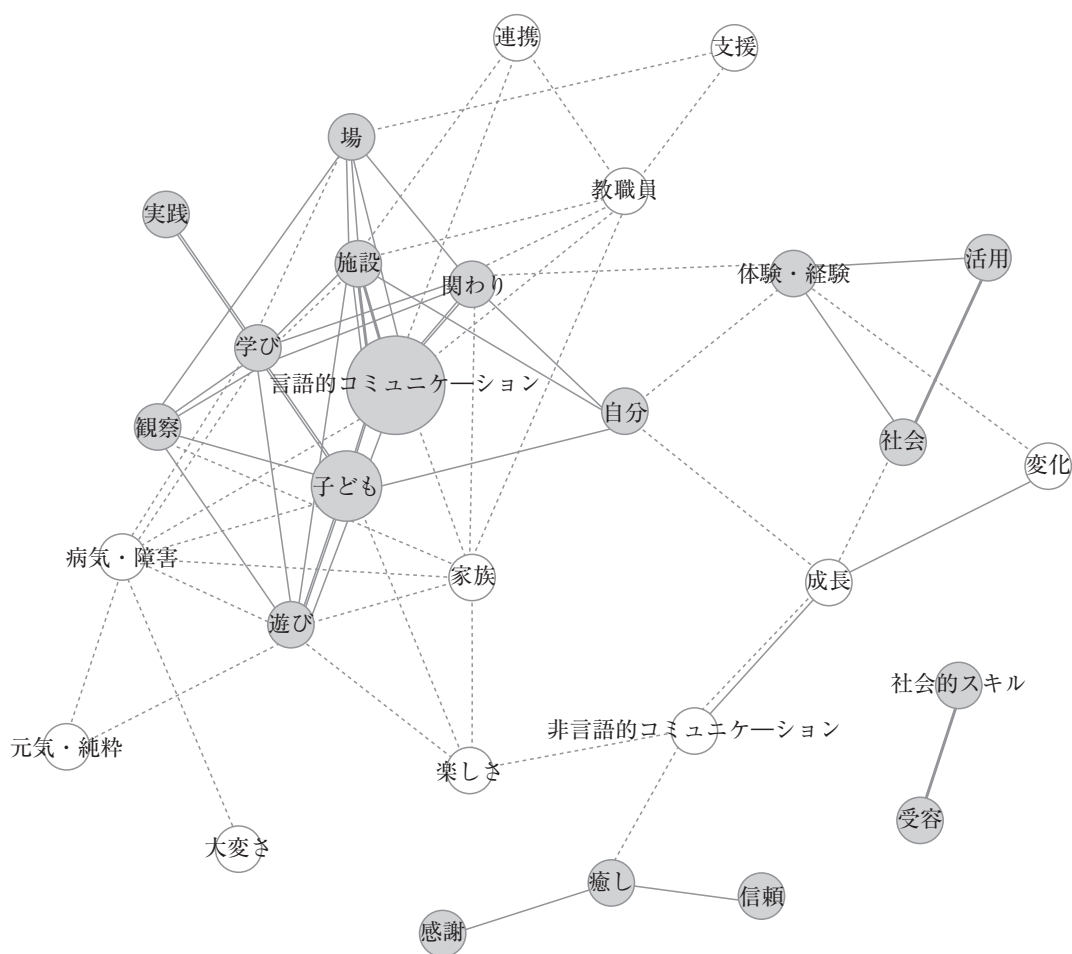


図1 コードの共起ネットワーク

「大変さ」、「教職員」、「連携」、「支援」のコードは、他のコードとグループを形成していない単独のコードである。

4. コードの階層的クラスター分析

出現パターンの似通ったコードの組み合わせにはどのようなものがあつたのかを調べるために、クラスター数を8としてWard法による階層的クラスター分析を行った結果、以下のように分類された(図2)。

[クラスター1]

「社会」、「活用」(2コード)

[クラスター2]

「社会的スキル」、「受容」(2コード)

[クラスター3]

「自分」、「学び」、「成長」、「体験・経験」、

「変化」(5コード)

[クラスター4]

「非言語的コミュニケーション」、「癒し」、「信頼」、「感謝」(4コード)

[クラスター5]

「言語的コミュニケーション」、「子ども」、「関わり」、「場」、「施設」、「実践」(6コード)

[クラスター6]

「観察」、「遊び」、「家族」、「楽しさ」(4コード)

[クラスター7]

「教職員」、「支援」、「連携」、「興味・関心・意欲」(4コード)

[クラスター8]

「病気・障害」、「大変さ」、「元気・純粋」、「感動」、「自信」(5コード)

メンタルフレンド活動におけるメンタルフレンド自身への効果

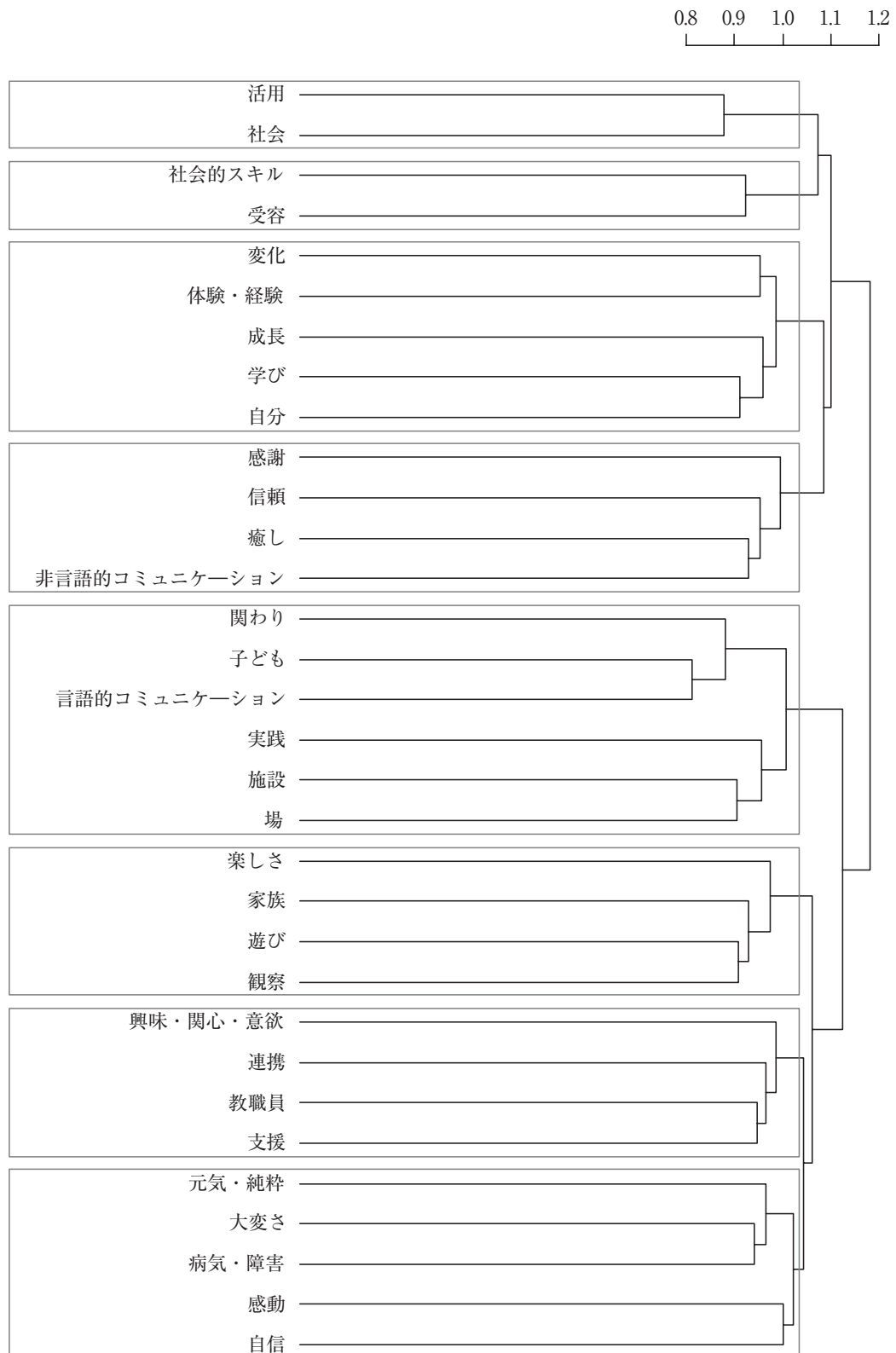


図2 コードの階層的クラスタ分析

IV 考察

1. 量的分析の結果から

コードの共起ネットワークと階層的クラスター分析の結果から、メンタルフレンド活動におけるメンタルフレンド自身への効果を考察する。「言語的コミュニケーション」による「子ども」との「関わり」をもち、「施設」における様々な「場」において「実践」することがメンタルフレンド活動の核となっている。子どもとの「遊び」において、「観察」したり子どもや「家族」と関わったりすることが「楽しさ」につながっている。メンタルフレンド活動において、施設の「教職員」からの「支援」があることや、施設の教職員と「連携」することが、「興味・関心・意欲」に関連している。「病気・障害」のある子どもたちと

関わることは「大変さ」を伴うものではあるが、子どもたちの「元気・純粋」な面と相まって、「感動」を得ることや「自信」をもつことにも結びついている。

また、「非言語的コミュニケーション」は「癒し」になり、「感謝」や「信頼」にも関連している。「自分」の「学び」は「成長」につながり、「体験・経験」することで「変化」にもつながる。体験・経験したことが、「社会」において「活用」されることになる。さらに、「受容」することと「社会的スキル」とが関連しているが明らかになった。

2. 質的分析と量的分析による結果の比較から

表3は、先行研究における質的分析の結果と、本研究における階層的クラスター分析の結果を比較したものである。

表3 質的分析と量的分析による結果の比較

	質的分析 【概念】、＜カテゴリー＞	量的分析 [クラスター]、「コード」
成長	【自己の成長】 ＜視野の拡大＞ ＜修得知識の実践＞ ＜他職種への興味や再理解＞ ＜社会人マナーの習得＞ ＜対人関係調整力のアップ＞ ＜子ども達の現実認識＞	[クラスター3] 「自分」、「学び」、「成長」、「体験・経験」、「変化」 [クラスター5] 「言語的コミュニケーション」、「子ども」、「関わり」、「場」、「施設」、「実践」 [クラスター7] 「教職員」、「支援」、「連携」、「興味・関心・意欲」 [クラスター1] 「社会」、「活用」 [クラスター2] 「社会的スキル」、「受容」 [クラスター8] 「病気・障害」、「大変さ」、「元気・純粋」、「感動」、「自信」
癒し	【自己の癒し】 「子どもや母らとの信頼関係の構築」 「自身の遊び」	[クラスター4] 「非言語的コミュニケーション」、「癒し」、「信頼」、「感謝」 [クラスター6] 「観察」、「遊び」、「家族」、「楽しさ」

先行研究の「『メンタルフレンド活動』におけるメンタルフレンド自身の主観的体験」において抽出された概念のうち、メンタルフレンド自身への効果に関する概念は、【自己の成長】【自己の癒し】であった。活動開始後は、メンタルフレンド自身についての【自己の成長】【自己の癒し】を認識していた。先行研究におけるカテゴリーを【 】, 概念をく>で示している。【自己の成長】においては、施設への訪問や他のメンタルフレンドや子どもたちとの関わりより、新たな知見を得たり自身の成長を感じたりすることをく視野の拡大>として捉えていた。講義での学びや身近な保育士や他学科のメンタルフレンドといった他者から学び得た子どもたちとの関わり方をく修得知識の実践>として試みたり、他者の子どもたちとの関わり方を見たり話したりすることでく他職種への興味や再理解>が進み、メンタルフレンドという学外での活動を通して、く社会人マナーの習得>につながったことが語られた。子どもたちとの関わりからは、それぞれの環境におかれている状況下で見せるありのままの姿を知るく子どもたちの現実認識>や、何度となく繰り返される、子どもたちの乱暴や言葉使いに対する対応への慣れを、自身の日常生活に役立てているく対人関係調整力アップ>として認識していた。また、く子どもや母らとの信頼関係の構築>を実感し、子どもたちとの関わりをく自身の遊び>として捉えることで【自己の癒し】²⁾ともなっていた。

先行研究における質的分析の利点は、各概念内のカテゴリーの関連を文脈に沿って解釈できるところである。しかしながら、概念間どうしの関連については、必ずしも明確ではなかった。本研究の量的分析では、文脈に沿った解釈という点で弱い面があるが、各クラスター内のコード間だけでなく、クラスター間の関連についても、共起ネットワークや階層的クラスター分析などによって視覚的

に捉えやすいという利点がある。

本研究の量的分析の結果と先行研究における質的分析から得られた結果を比較検討してみると、いくつかの類似点を挙げるができる。【自己の成長】のカテゴリーと「成長」のコード、【自己の癒し】のカテゴリーと「癒し」のコードが、それぞれ対応している。また、「病気・障害」のある子どもたちと関わることによる「大変さ」が「感動」や「自信」につながることは、先行研究で抽出されたく子どもたちの現実認識>の概念と対応している。活動が楽しさだけではないことが、メンタルフレンド自身への効果を高めることの一つの要因になっていることが分かった。

また、本研究における新たな知見は、「子ども」との「関わり」や「学び」が「言語的コミュニケーション」と強く結びついているのに対し、自分の「成長」と「癒し」のそれぞれに「非言語的コミュニケーション」が関連していることが示されたことである。

V おわりに

先行研究と本研究との結果には、多くの類似がみられた。質的分析による文脈に沿った解釈と今回の量的分析によって、メンタルフレンド自身への効果についてより深く捉えることができたと考える。また、本研究において、メンタルフレンド活動は言語的・非言語的コミュニケーションを媒介としてなされており、「学び」という認知面では言語的コミュニケーションが大切であり、メンタルフレンド自身の「成長」や「癒し」という心理面においては、非言語的コミュニケーションが重要であることが明らかになった。近年、メンタルフレンド活動に限らず、実習、就業などにおいても、コミュニケーション力の育成が求められている。本学の教育活動においてどのようにコミュニケーション力を育成し、実際に活かす場の一つとしてのメンタル

フレンド活動にどのようにつなげていくのが課題である。さらに、活動継続における鍵は、施設の「教職員」の支えであることから、大学と施設の「教職員」との連携という視点も欠かせないことが再認識された。

引用文献

- 1) 新潟青陵大学現代G P指導室. 新潟青陵大学現代G Pブックレット メンタルフレンド活動による地域福祉展開 ひきこもり不登校児や長期入院児童の教育・福祉・看護への学生参加型トータルケアシステムの開発. 9. 新潟:新潟青陵大学;2008.
- 2) 河内浩美・中村恵子・小林正子ほか. 「メンタルフレンド活動」におけるメンタルフレンド自身の主観的体験. 新潟青陵学会誌. 2010;3(1). 53-61.
- 3) キャサリン ホープ・ニコライ メイズ・ジェニー ポペイ. 伊藤景一・北素子. 質的研究と量的研究のエビデンスの統合 ヘルスケアにおける研究・実践・政策への活用. 20. 東京:医学書院;2009.
- 4) ジョン クレスウェル・ビッキ プラノ クラーク. 大谷順子. 人間科学のための混合研究方法 質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン. 5-6. 京都:北大路書房;2010.
- 5) 樋口耕一. KH Coder. <<http://khc.sourceforge.net/>>. 2011年6月15日.
- 6) 樋口耕一. KH Coder 2.x リファレンス・マニュアル. <http://jaist.dl.sourceforge.net/project/khc/Manual/2.Beta.25/khcoder_manual.pdf>. 2011年6月15日.

参考文献

- 1) 藤井美和・小杉考司・李政元. 福祉・心理・看護のテキストマイニング入門. 東京:中央法規;2005.
- 2) ジョン・クレスウェル. 操華子・森岡崇. 研究デザイン—質的・量的・そしてミックス法. 東京:日本看護協会出版会;2007.
- 3) 松村真宏・三浦麻子. 人文・社会科学のためのテキストマイニング. 東京:誠信書房;2007.
- 4) 上田太一郎. 事例で学ぶテキストマイニング. 東京:共立出版;2008.